

5万分の1地質図幅「熊川」

中江 訓¹⁾・吉岡 敏和²⁾

鯖街道-それは小浜湾で獲れた海産物を京の都に運ぶ古代からの陸上輸送ルート。街道沿いに今も残る熊川宿の面影(第1図)。そんな情緒と歴史を探索するのも、この図幅地域の楽しみかもしれません。

若狭湾南方から京都北山にかけて広がる丹波山地には、標高600-800mの稜線をもつ深い山並が続いており、熊川地域の大部分はこの山地に位置しています。この地域の地質は、山地を構成するジュラ紀付加コンプレックスと、これに貫入する花崗岩、さらに台地や沖積平野に分布する新生界に、大きく区分されます(第2図)。

丹波帯-丹波山地はジュラ紀(約1億8,000万-1億4,000万年前)に形成された付加コンプレックスからなります。これは当時の海溝で海洋プレートが大陸プレートの下に沈み込む際に、海洋プレート上

部を構成していた岩石(玄武岩・チャートなど)と大陸側から供給された砂や泥などの陸源性碎屑物とが混ざり合ってきた地層です。熊川地域の付加コンプレックスは、岩相・地質構造・形成時代の異なる5つの構造層序ユニットに細分されます(第3図)。これらは互いにスラストで境され、構造的低位より由良川・椋川・河内・下根来・多田コンプレックスの順に累重しています。これらのコンプレックス内部は、海洋プレート上部の構成岩石と陸源性の岩石が混在してできた複雑な地質構造を示しています。しかしながら、放散虫などの化石をそれぞれの岩石から抽出して、その地質時代を丹念に検討することで、付加コンプレックスが形成される直前の構成岩類の累重関係を復元することができます。

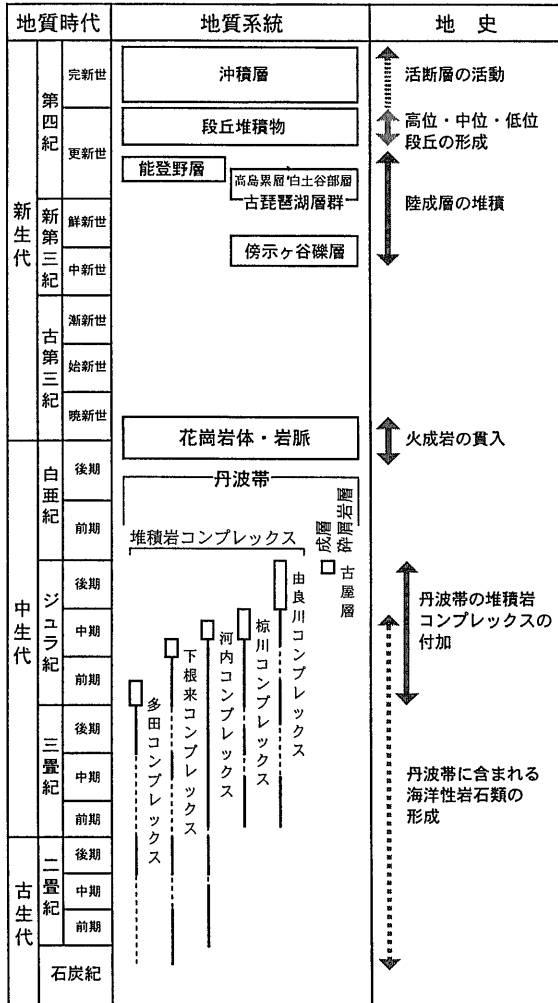
またこの地域では、海洋性岩石(玄武岩やチャ



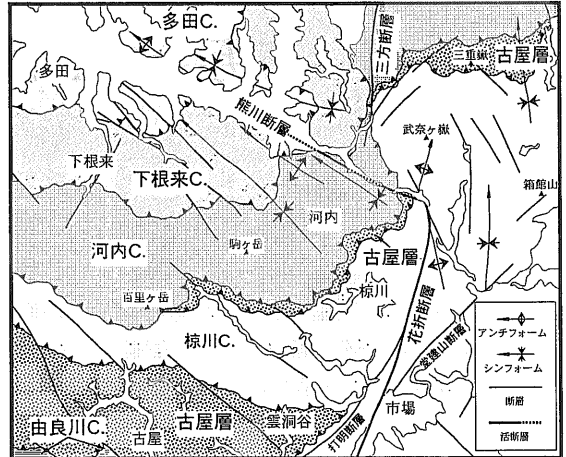
第1図 熊川宿の街並。

1) 地質調査所 地質部
2) 地質調査所 地震地質部

キーワード: 地質図幅, 熊川, 丹波帯, ジュラ紀, 付加コンプレックス, 傍示ヶ谷礫層, 古琵琶湖層群, 能登野層, 活断層



第2図 熊川地域の地質総括図。



第3図 熊川地域における丹波帯の地質概略図。

傍示ヶ谷礫層は、クサリ礫を含む暗褐色の著しく風化した礫層からなり、新第三系と考えられますが、具体的に時代を示す資料は得られていません。古琵琶湖層群は非海成の鮮新-更新統で、熊川地域ではそのうち最上部にあたる高島累層白土谷部層だけが分布します。この部層は主にシルト層と砂層からなり、しばしば炭質物を含んでいます。また白色ガラス質の火山灰層も挟まれています。能登野層は礫混じりのシルト層を主体とし、下部ないし中部更新統と考えられています。また段丘は高位段丘・中位段丘・低位段丘に大きく3分され、さらに段丘面の比高等から、中位段丘を4面に、低位段丘を3面にそれぞれ細分できます。段丘を構成する堆積物は、砂-シルト層を挟む円-亜円礫層を主体としています。

活断層-最近、内陸を震源地とする地震の発生源として活断層が注目されています。熊川地域にも「三方」・「熊川」・「花折」の3条の活断層の存在が知られています。このうち花折断層についてはトレンチ調査が行われ、1662年に琵琶湖北西部を襲った地震の際に活動した可能性が指摘されています(吉岡ほか, 1997)(注)。

注) 花折断層のトレンチ発掘等による活動履歴調査。地震予知連絡会会報, no.58, p.541-546.

ートなど)を含まず、変形の弱い成層した碎屑岩からなる地層(古屋層)も見られます。

花崗岩-丹波帯の付加コンプレックスに貫入する花崗岩は、等粒状で中粒の黒雲母花崗岩からなり、古第三紀初頭に形成されたと推定されます。

新生界-新生界は、本地域南東部の台地に広く分布するほか、山間部の主要河川に沿っても見られます。これらは地形面との関係、風化状態等から、傍示ヶ谷礫層、古琵琶湖層群、能登野層、段丘堆積物などに大別されます。